



甲斐源氏と源平合戦

甲府盆地の縁辺部に拠点を置き、勢力を蓄えてきた清光の子孫たちは、1880(治承4)年から1885(元暦2)年の足掛け6年にかけて起きた治承・寿永の乱、すなわち源平合戦を機に歴史の表舞台へと躍り出ます。

1880(治承4)年、後白河法王の息子・以仁王(もちひとおう)の呼びかけに応じ、各地の源氏勢力たちが蜂起しました。そして武田信義(たけだのぶよし、1128年—1186年)・一条忠頼(いちじょうただより、生年不詳—1184年)親子、安田義定(やすだよしさだ、1134年—1194年)をはじめとする甲斐の源氏たちも兵を挙げ、勝ち進んでいきます。源平は攻防を繰り返しながら、1185(元暦2)年、壇ノ浦の戦い(山口県)で平氏の嫡流が滅亡します。この一連の戦いの中で、甲斐の源氏たちは強力な武士団として存在感を示していき、「甲斐源氏」と呼ばれるようになります。これが、現在まで続く「甲斐源氏」という呼称の起こりです。

同時期に挙兵し勢力を伸ばしたのが、かの源頼

朝(みなもとのよりとも、1147年—1199年)です。源頼朝は甲斐源氏と同じ清和天皇の子孫であり、新羅三郎義光の兄・義家の玄孫に当たります。同じ祖を持つ甲斐源氏は、頼朝にとって味方でもあり、警戒すべき敵でもありました。

頼朝は、自分を中心とした組織づくりを進める過程で、独立心の強い甲斐源氏が障害になっていると考え、排除することを企てます。一条忠頼は殺害され、父・武田信義は引退。安田義定も、息子・義資(よしすけ、生年不詳—1193年)と共に相次いで処刑されました。

一方で、甲斐源氏の中には厚遇された者もいました。武田信義の息子・武田信光(たけだのぶみつ、1162年—1248年)は源頼朝に仕え、信義の嫡子・一条忠頼が殺害された後、武田の本流を継ぎました。加賀美遠光(かがみとおみつ、1143年—1180年)、その子で小笠原氏の祖である小笠原長清(おがさわらながきよ、1162年—1242年)も頼朝に重用され、特に長清は鎌倉幕府成立後、政治の中樞に位置しました。しかし、権力に近いがゆえに、小笠原家は不安定な立場でもありました。そうした中、朝廷と鎌倉幕府が争った大きな戦・承久の乱(1221

(承久3)年)が起きました。小笠原家は朝廷に付くことも考えていたようですが、当時鎌倉幕府の実権を握っていた北条義時(ほうじょうよしとき、1163年—1224年)が示した恩賞が決め手となって武田信光

鎌倉時代から室町時代へ

武田信光の子孫である武田の本流は、承久の乱などを通して鎌倉幕府の実権を握る北条得宗家(ほうじょうとくそうけ)と関係を深め、甲斐国の守護となりました。しかし、鎌倉時代の甲斐国内には、他にも有力な御家人の所領があった上、幕府からの牽制もあり、あまり力は大きくありませんでした。一方で、武田氏を含む甲斐源氏らは京都で皇居を警護したり、甲斐国衙は京都の貴族を国主としてその収益を朝廷の経営に充てたりと、朝廷とのつながりも保っていたようです。微妙な権力バランスの中、甲斐国守護は武田氏の様々な系統に受け継がれましたが、最終的に武田信武(たけだのぶたけ、1292年—1359年、生没年異説あり)の系統に引き継がれました。信武は承久の乱の後に安芸国(広島県)へ移住していた武田信時(たけだのぶとき、武田信光の孫)の曾孫で、これは武田信虎(たけだのぶとら、1494年—1574年)―信玄―勝頼(かつより)に続く系譜です。

全国へ展開した甲斐源氏

武田氏が安芸(広島県)にいたように、甲斐源氏たちが活躍したのは、甲斐国の中だけではありません。甲斐源氏は幕府の内乱や承久の乱、モンゴルの襲来などを契機として甲斐国外の恩賞地に勢力を広げ、全国へと展開していきました。武田は若狭(福井県)に、小笠原は信濃(長野県)・尾張(愛知県)・阿波(徳島県)・長門(山口県)・石見(島根県)に、南部は奥州(東北)に、浅利は出羽(山形県、秋田県)に、逸見は和泉(大阪府)・出雲(島根県)に、その他の一族も讃岐(香川県)、豊後(大分県)へと進出します。彼らは各地に甲斐源氏の伝統を受け継いでいきました。

と共に鎌倉方につき、勝利に貢献します。この活躍により、小笠原家・武田家は源氏の名門としての地位を再び確保することができたのです。



甲州市塩山 塩の山とJR中央本線

室町時代以降(14世紀—)、信時の流れを汲む武田氏は甲斐国守護を引き継ぎながら、塩山(えんざん、甲州市)の周辺を治めましたが、他の勢力と常に押し合いへし合いの領地争いを繰り返していました。その間、室町幕府と鎌倉府(東国を治める幕府の機関)、朝廷は、貴族や武将たちを巻き込みながら、複雑な権力闘争を繰り返します。やがて、幕府、鎌倉府、朝廷が弱体化すると、全国で各地の武将たちが権力闘争を繰り返す、いわゆる戦国時代(15世紀末—16世紀末)が訪れました。

甲斐国のサムライ文化と平泉・鎌倉

甲斐源氏の始祖・新羅三郎義光も参戦した後三年合戦(1083年—1087年)の後、奥州藤原氏(おうしゅうふじわらし)が東北の統治者となります。金採掘や宋(中国)との直接交易などによって大いに栄えた奥州藤原氏は、拠点である平泉に京都から技術者を呼び寄せ、浄土をあらわす寺院を次々と建立すると共に、武家の都として整えていきました。

源頼朝は栄華を誇る平泉の文化や生活様式を吸収しながらも、その威勢を警戒して奥州藤原氏を滅ぼしてしまいます。一方で頼朝は、平泉を参考にこれまでにない本格的な武家の都を鎌倉に造営しました。

同時代に勢力を伸ばした甲斐源氏たちは、当時の日本の文化的・政治的中心地であった京都の文化だけではなく、こうした平泉や鎌倉のサムライ文化の影響も大いに受けていました。こうして彼らは弓馬、金採掘、治水などの高度な技術を手にして各地に進出し、歴史的に重要な局面となる戦や政治の舞台でその実力を発揮していきます。